PAPER

システム思考での目的論理の構造と社会倫理について II

（目的性論理の価値認識の「上限境界線」を考えること）

System Thinking, Teleological Structure and Social Morality II

(On Frame-work Seeking onto Upper-Bounds of Objectives)

Yasumasa Arai
Senior Professional Chemical Engineer
E-mail: araraiypol1a@nifty.com
(2014-December)

荒井　康全
上席化学工学技士
TEL: 042 795 3348
東京都町田市南つくし野 4-11-22

Abstract :　General System Thinking is　a theory of an object under concern taken as organized fundamentally frame with objectives and constraints and this author looks into the meaning of decision making taking into account "human free will" and "natural causality", so-called.　That is to be said, he enquires into the concept of purpose in its human and social dimensions. He does this with reference to Kant's Critique of　Judgement and consider, in particular, an ' upper bound' teleological problem structure.　This is a collection of essays, where he　places the focus to terms of “transcendental” and “experience” where he reviews the epistemological background through Immanuel Kant, how this philosopher provides ideas to modern science with respect to the status of a prestigious position into human world, and after then , what kind of problem we have unavoidably faces the fundamental problems to be overcome　in a view point of philosophy under diversified and fundamental background to morality in order to sustainably and peacefully share globally　the human society and the nature, now and future.

keywords: System　Subject,　Object,　Upper-bound-objectives,　Transcendental,　Experience, Model, Ultimate Being,　Kant, arbitrate free, Voluntarism, Intellectualism, Parmquist, Model of God

要旨：　一般システム思考は　基本的には　目的関数と制約条件で構成されるが、これを　一旦　「人間自由意志」と「自然因果律」という次元にまで抽象化して　そのなかで意志決定することの意味、つまり目的概念についての人間と社会次元での概念考察をおこなう。本論第 II 報は　既報である第 I 報　～序論　カント「判断力批判」を読んで～を受けての各論の位置づけにおく。　すなわち、思考の焦点を目的性論理の価値認識の「上限境界線」に当てる。　このための場として、カントの認識論哲学の文脈をつかって、　人間の知的活動、特にシステム思考における対象として、科学的目的性からはいり、その許容されるべき価値認識を取り上げる。ここで、超越論的次元と経験的認識論的次元との思考界面を「上限境界線」問題と位置付、この構造形式を論ずるものである。　カントの認識哲学の枠組みでとくに「超越」と「経験」を復習し、この界面の哲学的意味を確認する。つぎに、「超越」側からその概念を、システム思考の意味での「モデル」をとりあげ、さまざまのモデル概念を比較し、カントでの土俵での

位置づけをみる。　これは、経験的認識次元の位置づけを明らかにすることを試みるものである。　さらにこれらを使って、われわれの時代が遭遇する目的論の構造と価値の問題点を明らかにし、総合知としての必要な解決の方向を模索し提言するものである。
キーワーズ：　システム、　主観、　客観、　上限目的性、超越論的、　経験、　モデル、　究極存在（者)、カント、見届ける自由、意味論、知性主義、パームキスト、神のモデル

目次：
はじめに
１．　ブック・レビュー「科学者の研究目的の超越論的接点を考えるレビュー」

２．　「超越」と「経験」についての考察
　２．１　友人からの手紙
　２．２　友人への答案：思考のフレームとその説明
　　２．２．１　「純粋理性批判」から学んだこと
　　２．２．２　答案の部分
３．　「神」のモデルについて
　３．１　ことばあそび～　「神」、「god」、「God」
　３．２　神や究極的実在性を考える「モデル」について
　　３．２．１　超越者（または神）のモデルについて
　　３．２．２　カントが考える価値認識の「上限境界線」
４．　考察　システム思考と社会倫理としての課題の切り口
　４．１　「価値自由」（マックス・ヴェーバーの「価値自由」を連想して）
　４．２　「正しさ」について、特に超越論的な「正しさ」に関連して
　　４．２．１　「正しさ」の意味の確認
　　４．２．２　特に超越論的（宗教的）な次元で
　　「RIGHT」　と「RIGHTEOUS」について
　　４．２．３　「RIGHT」　　と「RIGHTEOUS」について事例考察
　　４．２．４　「罪」に対する清算と「責任」について
　　４．２．５　この節のまとめ
　４．３　日本および日本人に　課せられた責任倫理としての「方向性」思想
５．　　結言と謝辞
付録　書評翻訳：K．J．クラーク「神および究極実在性についてのモデル」
参考文献

はじめに

一般システム思考は　基本的には　目的関数と制約条件で構成されるが、これを　一旦　「人間自由意志」と「自然因果律」という次元にまで抽象化して　そのなかで意志決定することの意味、

つまり目的概念についての人間と社会次元での概念考察をおこなう。本論第 II 報は　既報である第 I 報　～　序論　カント「判断力批判」を読んで～[1],および同報　目的論理の構造としての「自由意志」と「因果性」を考える　－カント「純粋理性批判」の文脈を通して　－[2]を受けての各論の位置づけにおく。

まず、科学者の超越的接点をどう考えるかを、章　１．でブックレビューの形でのべる。つぎの　章　２．は、この研究の流れであるカントの認識論を使って、目的論理を考えるべき位相を「可想体」と「可視体」の思考構造のモデルを述べる。つぎにこのモデルを使って目的論理を扱うときの思考上の限界なるいわば「上限境界線」について焦点を当てる。特に、認識論の基盤である「経験」と「超越」との接点触れ、なぜそれを考える必要があるのかを書簡問答形式を使って論じる。

三番目の章　３．は、この「超越」概念について、現在、哲学の世界では具体的にこれをどう考え捉えているのかに焦点をあてる。　「超越（者)」をいま思考概念モデルとして考えるときに、その究極存在者（神）の認識問題がある。　最近の英語圏、特にアメリカ哲学会での研究プロジェクト「神のモデル」を概観し、本論でのカントの「土俵」の位置づけに言及する。

最後の　章　４．は、考察として思考の「上限境界線」を考えることから帰着する実践上の、特に社会倫理上の課題への切り口を探索する。これらは科学技術などが抱える目的論とその価値など現代的問題への思考準備として、つなげることを意図するものである。

１．　ブック・レビューブック・レビュー

「科学者の研究目的の超越論的接点を考えるレビュー」[3]

目的関数の上限境界線 upper bound」が思考の焦点をあてるために　以下の著を思考教材として使って進めたい：

古田博司著　ヨーロッパ思想を読み解く　―何が近代科学を生んだか[4]

本の見出しは、次の通りである。なぜヨーロッパに近代科学を生み出す思想が発達したのであろうか。　それは「この世」の向こう側を探る哲学的思考が、ヨーロッパにのみ発展したからなのだ。人間の感覚器官で接することのできる事物の背後（＝向こう側）に、西洋人は何を見出してきたのであろうか。バークリ、カント、フッサール、ハイデガー、ニーチェ、デリダらが繰り広げてきた知的格闘をめぐって解説を加えて、思想史再構築をこころみるとしている。

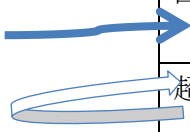
～～～～～

筆者は「向こう側」と「こちら側」の用語使いは、古田のものであるが　以下の図１のように　（神域）～（向こう側）～接点（直観、超越）～（こちら側　科学するこころ）を上げる。　ここで彼のモデルでは（向こう側）は　この世であってよいとしている。

図１　古田氏からの図式　西洋（神域とこの世）

	神域	この世

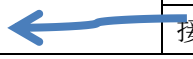
西洋		向こう側	こちら側		
			直観（可視体）[1]	科学する心	
			超越（可想体）[2]		



われわれが見る事物を（こちら側）とするときに、その背後に「人間感官」と接することのできる事物の背後（向こう側）の存在があり、それは証明できないが超越的なドメイン（もしくは　境界）があってそことの思考上のやりとりがある。これが近代科学を生んだという説明の枠組みである。ついでながら　図２に、これに対する日本は（こちら側）はこの世でそれに接近するのはあの世つまり異界であるとして、思考上のやりとりの希薄な思考構造としている。　この違いさえ示せば、あとは　仮説的にいくらでも語ることができるので　読者をひきこむと推測する。

図２　古田氏からの類推　日本の場合（異界とこの世）

		この世（＝こちら側）		
日本	異界		科学する心	
		接近		



著者の意図と反しては失礼になるので、図式も　そのままのものにした。[3] 著者は　この図で注意深く扱っているところは、この接点の部分であろうか。ひとつは「直観」、もうひとつは「超越」と区別している。

筆者は、これをあえて、思考になじんでいる、カントの認識論モデルと対比して読み進めた。前の「直観」については、人間の思考体のひとつである「人間の感官」をつうじての経験的認識であり、カントのいう Phenomenon(可視体、もしくは可能体)で、後の「超越」については、この問題を人間の思考体のひとつである（感官からの外的な接点からの経験を直接伴わない）アプリオリな純粋思考の世界である。このアプリオリは、(超越的）感性ともよんでいるが、ここでいう「超越」的認識であり、カントがいう　Noumenon（可想体）になる。

いま、可想体としての課題（命題）を成立するために　「超越」からの境界条件が必要で、これによって問題が（閉じた形式として）成立する。　アプリオリに我々に来す超越の内容はなにかというと、いま　人間が必要とする「普遍」的なにか、あるいは「超越者」ともいっておきたい。　著

1 「可視体」　荒井の解釈としておいた
2 「可想体」　荒井の解釈としておいた
3 「向こう側」と「こちら側」の境界を　あえて「人間感官」としてのみ採用しているかには　バークリなど英国の経験主義の哲学的な思考フレームを使っていることが読後わかった。

者は、そういうもの哲学的な態度を、この本で延々と展開するものである。　著者は、英国のバークリなどの経験主義のながれがお好きなようで、「可視体」にのみ留まり、ドイツ哲学のように　「普遍性」などといったところで、カントの勝手な「普遍性」だとして、思考のドメインから外そうとするが、そう簡単ではないようです。

この本で、この図式モデルの説明は、大切なところで　理性、悟性、超越性、直観、現象という言葉をつかいながら、その説明は、どちらかというと軽く語っており、一本筋がとおったものにしていないのが残念である。

一方、筆者の作った図式は以下である（図　3）；

超越的世界～接点（超越的感性）～（Noumenon(可想体);

理性　理念　自由意志）～接点（？記号化した条件）～（Phenomenon(可視体);　悟性　概念（現象）　経験）～接点（直観）～外界

図　3　カントの認識モデルでの　こちら側と向こう側の図式

	向こう側		こちら側				向こう側
カントの認識論モデル	超越的世界	接点	可想体	接点	可視体	接点	（外界）
	道徳律	超越的な定言	理性 理念 自由意志 物自体	？記号化した条件	悟性 概念 現象 経験	直観	

この構造は　この本の著者のものと本質的に同じであると考える。　彼の(向こう側)というのが 思考体としての(Noumenon)であり、ここでの境界条件が　「超越」的なものである。また　彼の（こちら側）といいうのが思考体としての（Phenomenon)で、境界条件は　感官経由で「直観」でえた「経験」とする。

しかし、上の状態だけでは問題（命題）はまだ閉じていない。Noumenon と Phenomenon がつなぐ条件が必要である。西側世界では、Noumenon に作用する超越的感性は、キリスト教倫理であるという前提であり、それを理性の働きによって、人間の実践行動の規範つまり実践「目的」を設定すると考える。これを、Phenomenon につなげる接合条件（境界条件のひとつ）にすると考えたはずである。時代背景としては　ニュートンの物理学を頂点とする人間の知性（理性＋悟性）への信頼感と希望がある。

Noumenon からの接合条件としては　Phenomenon における自然認識に焦点があったと考える。科学への哲学的根拠をあたえたのは　カントの超越論（特に、空間・時間・人間意志自由・超越者の存在の四つの主観への位置づけ）であったといえよう。キリスト教の倫理観の基盤のもとで、人間の自由意志によって　自然からの経験と現象を概念化に専念する。　科学研究が道徳と表面的には切り離されて進行していったと、すくなくともわれわれ日本人には見える。

さて、ここまでは　上の著は　特にあたらいしことを提示していないと思うし、その先も　確たる提言をしていない。(こちらもまだなにも提示していない)

カントの Noumenon と Phenomenon の接点のところは、日本人には形式的には　わかりやすいモデルであるとおもう。　欧米人がやっていることを横目でみて　Phenomenon ですぐれた功績をあげることは　現実に成功しているし、非欧米世界にも大いに啓示的であったとおもう。

問題は　この本の著者がいうように　Noumenon とその接点の「超越」の部分であるとおもう。ここは　人間が、この社会が、(この国が)、人類が、・・・という次元への広がりで、いかに生きるかという部分である。

この問題を　科学者の問題は、phenomenon を思考ドメインとするとき、その境界条件として　至高ベストとはいえぬまでも実践的ベストを、苦闘して共有のものにすることは　科学者としての基本的素養であって、避けて通れない「must」であると　書いておきたい。

（これがないと　日本の知識人が非モラル的な存在として孤立してしまうかもしれない)

この本で気になったところのひとつに　著者の数学理論への期待が延べられるが、この辺の知識は　あまりにも表面的であり、材料をならべてお茶を濁している観がある。たとえば　「非線形」の時代というときに　人間思考が線形であることを踏まえて、非線形にどう向かい合うのかという数理哲学的な思索と向かい合う真摯さがもとめられるとおもう。

また、「直線は 2 点をとおる」や「負数と負数をかけると正になる」というのをまとめて「超越」と括ってしまって、それが概念仮説であるのか、本来的超越であるのかを、思考のメスを入れないでいるところが、いかにも論理が粗いとおもった。こういうところに　目的関数の「上限境界線 upper-bound」を見ていくことにも　意味あることであると感じたのである。

２．　「超越」と「経験」についての考察

ここでは、「Transcendental(超越主義性)」と「経験」についての考察」である。カントの認識モデルをつかって　課題（命題）を５形式まとめてみた。これをもとに　話をまとめたいとかんがえている。いまいえることは、どの命題を扱うにしても、「超越性」は着いてくる。友人へ送った定期試験としての答案型式を借りて記述する。

２．１　友人からの手紙

私は純粋理性批判[5]の初めのところで躓きました。カントは言います。「我々は全てのことを経験から得る」　では、何故経験とは何かと問わないのでしょうか。カントはすぐ経験によらないもの

があると、超経験の世界に飛び込みます。おかしくありませんか。
そのおかしさは、実践理性批判でも引きずっています。人間は間違うものだということを認めないカントの論理はそれだけでおかしいものです。ふっと思うのは、カントは神の存在を否定し、ひょっとして、人間が神だとしたのではないでしょうか。神なればこそ、経験の世界を無視し、超経験の世界に飛び込んだのでしょう。ドイツ観念論者は、皆自分を神だと思っている節があります。それに比べると、総てを否定した後に、われ考える故に我ありと言いながら、すぐ神の存在証明をして、自己の明証性を、神の明証性にすり替えるデカルトはかわいいものとしか言えません。
要は神というものを置かなければ議論できないヨーロッパの哲学は限界があります。それに比べるとアメリカ人のプラグマチズムはまだましかもしれません。人間は間違えるものだということを根底に置かない哲学は無意味です。
　もっと云えば、人間が考えるということは妄想していることだというべきでしょう。逆に言うと、妄想すること、でたらめを言うこと、うそを言うことによって、人間は自由な思考を身に着けたのではないかと思います。(S.A)

２．２　友人への答案：思考のフレームとその説明

　SA さんからの命題を　定期試験問題の答案として書きます。SA さん、　おはようございます。
＊命題１「経験とはなにか」、命題２「人間は間違わないか」、命題３「超越的なものからなぜ考えるか」
反射神経回路でただ応答するのではなく、自分として、できるだけしっかり考えることができたらいいなあという重要な命題をいただきました。

＊自分のノートやメモをぱらぱら見ていましたら　ひとつ目にとまったのでひとまず、助走として以下を　置きます。ここで前提になる思考の文脈をカントにおきお話します。

～～～～

２．２．１　「純粋理性批判」から学んだこと

１．＊理性と悟性を導入したこと。
（合理主義と経験主義を統一したこと。）
（可想体（理性の場）と可視体（悟性の場）と分けたこと）
２．＊現象を導入したこと。
（時間と空間を主観の側においたこと。）
（　「自由」である人間と　感官からの認識表象である「現象」としての人間）[4]
（「自然因果律」と「自由意志」の無矛盾性を論証したこと）
　～～～～～～
　以下、いま取り組んでいるカントの思考フレームをつかいながら、荒井の考えを進めてみます。
＊１　人間は、自ら、生存していくために　思考と行動の意識（自由意志）をもっていることを自覚しているとする。

[4] （　人間の行動は　（自然）「現象」のなかの一部としたこと）

（もともと　つるつるの裸で　そのままでは　自然界で不利）

＊２　自らも自然界の一部であるが、自由意識が働くためには　自分（主体）とそれ以外の対象（客体）を区分することをした。

＊３　数学の例で語ると、集合論で　紙のうえに閉曲線で閉じた領域を描く、この中にあるものを思考の対象として考える。この閉曲線は　その人間（主体）が行わしめるもので　思考としての問題形式を与えることになる。

（開曲線であったらどういうことになるか）

＊４　主体が設定した閉曲線そのものは　その曲線の中とは　連続していてもいなくてもよい。数学学的にいえば　特異点に相当する。　微分方程式の例でいえば境界条件や初期条件に相当する。以降、便宜的に「境界条件」と呼んでおく）。

＊５　カントは　二つの境界条件を設けた。これらはいずれも、ア・プリオリ（先験的な直観として、存在の証明の仕様のない意識とした。

ひとつは、主体側の境界条件として「超感性的」からの表象（検証のしようのない表象）を、　客体側と主体側の境界条件として　「感官に伴う直観」からの表象（検証の可能な表象）を　それぞれ設定することにした。

＊６　閉曲線のなかの対象に対して　どのような意識表象をあたえるかは本来まったく自由であるが、カントは　これに対する「秩序」が存在していることを想定し、これを「現象」として位置付けた。　秩序を　記述分類モデル化して「カテゴリー」としたと考えられる。[5]

＊７　前後が逆になるが　主体側と客体側と分けて二つの体をモデル化したが　カントは　たとえば「自然がある、超越者はいる」という存在論（Ontology）から出発したのではなく、意識した表象を　主体の外で、存在にしても非存在にしても　構わないが　ところでそれを　どう知るのか、認識論(Epistemology)に着目した。　「現象」として「秩序」の仮説を前提とすれば　それを正しく知りうるのかで考えることにたどり着いた。[6]

＊８　結局、カントのモデルは　二つの思考体を対として　設定した。もっぱら主体（人間側）で考える「可想体」(Noumenon）と　感官が境界面（条件）で表象として獲得できる範囲で考える「可視体」（もしくは「可能体」）Phenomenon)である。

＊９　認識獲得のための形式としては　　５つ（　以下　I から V　まで）が、考えられる。

図　４．は　カントの認識の構造を図化したものであり[7]（荒井　2013b)、これを以下の説明に使う。

I　（Noumenon 系での認識形式）

境界条件（人間の自らの生存や共存の意識[8]からくる条件）

＋　閉曲線内（思考対象のモデル）

この系での　思考（思弁）の力を「理性」とした。[9]　　ここでの　果実は「理念」とした。

II　（Phenomenon 系での認識形式）

---

5 （　現象の背景には　天地創造への先験的意識を　暗に継承しているとみる）

6 （人間が「間違える」ことを前提にしている）

7 カント　「純粋理性批判」岩波文庫から荒井が図化したものである。

8 （誰があたえたかの問題がのこる？　）

9 （誰があたえたかの問題がある？　）

境界条件（感官を経て獲得した表象の内容[10]）　＋閉曲線内（現象のモデル）

この系での　思考の力を「悟性」とした。[11]　　ここでの　果実は「概念」とした。

III　問題形式　境界条件（I　（Noumenon 系））＋　閉曲線（　II　（Phenomenon 系））　　これを「形而上学」の問題とした。（(超越的感性から来る）人間としてあるべき命題に対して、行為の内容を解とする；道徳律）

IV　問題形式　境界条件（II　（Phenomenon 系））＋閉曲線（I　（Noumenon 系））

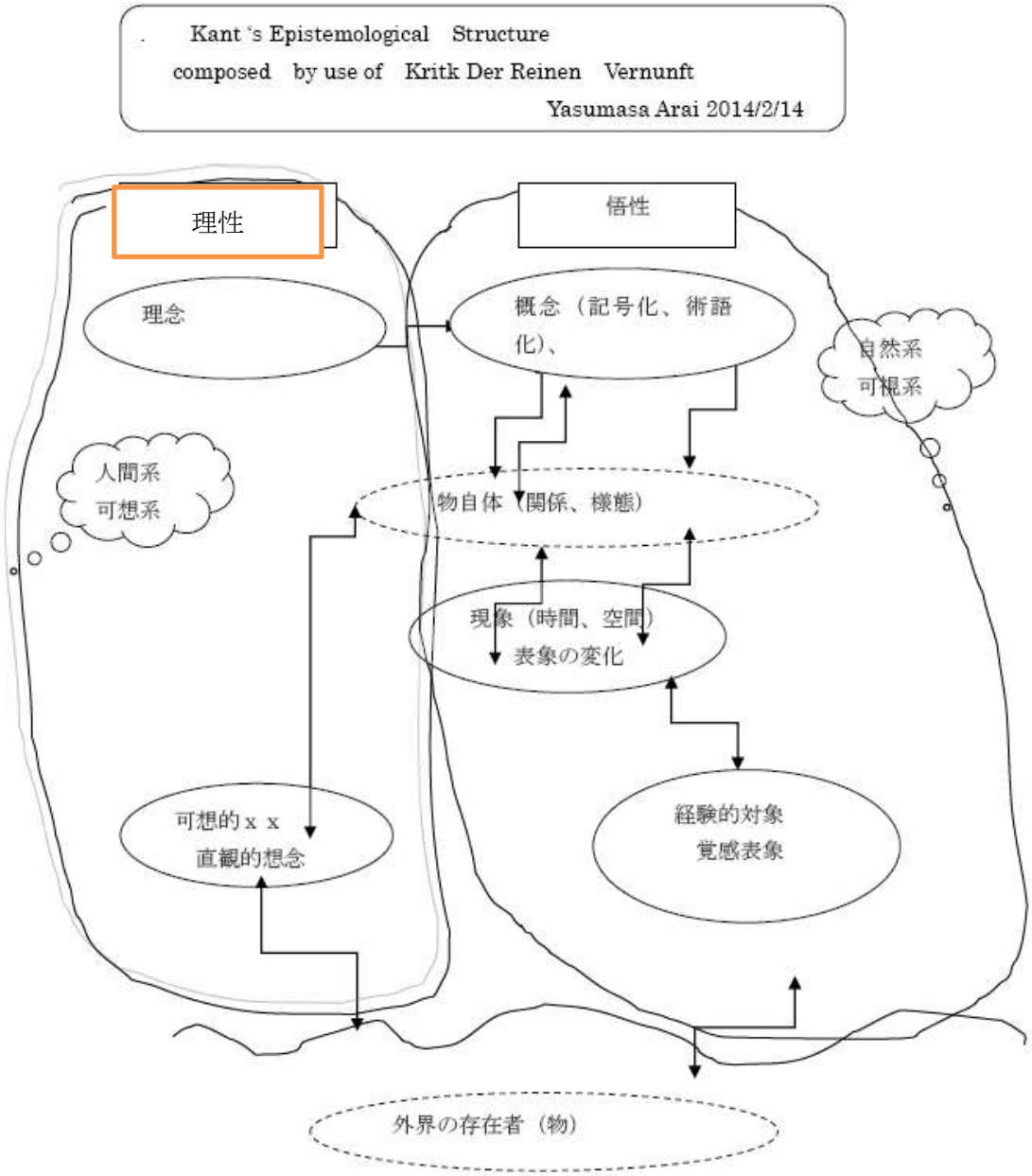
これが　実証主義哲学（ポジティヴィズム）へと展開していくことになる。（自然認識から　概念の形成を経て　解は、普遍的法則とする。

V　（　III　と　IV　の連成問題）　（理念にもとづき、自然法則に従った認識とそれにもとづき行為を解とする命題である。

10　データ　標徴

11　（誰があたえたかの問題がある？　）

図　4　　カントの認識のモデル図式



２．２．２　答案の部分

＊SA さんの命題　筆者が定期試験を受けていると想定しての答案です。

まず＊命題３「超越的なものからなぜ考えるか」

思考のモデルとして　問題が閉じた形式になるためには　境界条件として「超越的なもの」が必要になります。

つぎに＊命題２「人間は間違わないか」は、　phenomenon 系　つまり現象モデルという秩序や論理を　感官による経験の試行錯誤からの表象（つまりデータ）獲得によって　正しいか、否かの判定のための手段を獲得することになります。その意味で人間は間違います。また、「間違い」はなんであるかを知ることができます。

上の III と IV の問題形式で　形式としては存在しても　Noumenon 系からのくる境界条件が意味あるかどうかは　また別問題です。　しかし、科学主義が尊重されたのは、Noumenon 系の理性による思弁的な横暴　つまり　「間違い」をチェックできる根拠として　実証主義[12]が期待されて　ある部分答えてきたともいえます。（迷信の排除）

V の命題　つまり　III と IV の連成命題は　全人格的な命題で　近現代では　希薄になっているのではないかと　考えます。　当たり前のはなしですが、大げさにいえば巨大科学文明を構築して、呻吟している　アガメムノンである人類が　たたかいを続けなければならいない基本命題として　あらためて、意識されます。

＊命題１「経験とはなにか」

カントの哲学も　境界条件のところに主観（自由意志）を導入して　アンチノミー（二律背反）として思考のなかで理性の限界の判定（「理性の法廷」）をしています。　自由意志については　アンチノミーの二つとも誤りでないことを判定し、選択問題として　「自由意志」と「因果律」との存在を採用しています。

SA さんの指摘のように、「現象」という言語構造でとらえることのなかに　すでにこの主観の尾を引いています。

そういうことを承知のうえで、「経験」は狭い意味では　感性～悟性～理性連携を経て、言語化したこの系統の認識（「現象」）ということになります。

＊ところで　広い意味での「経験」は　芸術や　技術のように　上の「現象」系とは別の系列の認識獲得があります。　感性～理性に直接に飛んでいくものの経路は十分に考えることができます。

＊建築家の意匠デザインなどは　そのもっとも代表的な例となります。

カントは　純粋理性批判、実践理性批判のあとに　最後に　人間の合目的性のための能力として二つの「判断力」の概念を導入します。　それは「反省的判断力」と「規範的判断力」です。

＊「反省的判断力」　この感性～理性経路を　説明します。

（また、感性～悟性経路を「規範的判断力」とします）[13]

＊悟性～理性経路[14]も当然ありますが、　彼の晩年の哲学でもあり、十分に整理し、系統的に

---

[12] Positivism　実証主義

[13] 現象系とは　別の経路を仮定したようである。

吟味（批判）が展開しているとは　言い切れないと思っています。

プラグマティズムは　カントのながれから生まれたアメリカの哲学で　上の IV の問題設定と理解しています。　（底流にプロテスタンティズムの前提意志があるとおもいます）

＊「観念論者は自分を神とおもっているか」に対しては、　なんとも答えられません。

旧約聖書、キリスト教の精神土壌からいうと　基本は被創造物で、自然という「アパートの管理人」というのが一般的な意志ではないでしょうか。

＊この管理人がまことに　不遜であることが　どうも我慢ならないというところに
つながっていきます。

３．　「神」のモデルについて[6]

３．１　ことばあそび

ここでは、まず「神」についての辞書記載を　思考準備のために掲載引用する。ここでは日本で通常意味する「神」、英語でつよく意識されている「god」および「God」の三つを上げて、以降の思考のための参考として掲載した。使用した辞書はつぎのふたつである；　三省堂　「大辞林」、および「大英百科事典辞書」（和訳文は荒井康全）

表　１　「神」および　「god」

神[7]　　三省堂　「大辞林」

人格を超えた在り方・霊威をもち、人間に対して福禍や賞罰を与え、信仰・崇拝の対象になるもの。①（ア）　宗教・習俗において、信仰・崇拝・儀礼・神話・協議などの中心となる位格・存在。日本の神道や民俗においてまつられる対象、またはユダヤ教・キリスト教・イスラム教などの超越的絶対者。仏教では、仏や菩薩の権現・守護者などとされ、仏とは区別される。（イ）哲学で、世界や人間の有り方を支配する超越的・究極的な最高存在。②(ア)日本の神話で、神武天皇より前に登場する人格神。　（イ）天皇（ウ）人間に危害を加える恐ろしいもの。蛇・トラなど。（エ）かみなり。

god[8]　　「大英百科事典辞書」

1. A being regarded as possessing superhuman or supernatural qualities or powers, and made an object of worship or propitiation ;a higher intelligence supposed to control the forces of good and of evil; a personification of any of the forces of nature or some human attribute, interest, or relation; a divinity; deity.

超人もしくは超自然の性質や力を持ち､信仰の対象としてつくられた対象としての位格をもつとするひとつの存在 : 善の力と悪の力を制御すると想定されるより高い知性 ; 自然の力やある人間属性、興味、また関係の局面において人間類似化したもの ; 神性 ; 神

2. Any person or thing exalted as the chief good, or made an object of supreme devotion.　その内容を賞揚されるものとして、もしくは、崇高な献身の対象と為される

[14] 道徳律と格律（個人の価値観）と実践理性の命題経路である。

ひと　もしくは　物。

3. Anything that absorbs one's attentions or aspiration: Money is his god.

ひとの注意と気概を吸収するもの。

4. The embodiment of some aspect of reality or of some being regarded as the ultimate principle of the universe: the god of justice.

現実へのなんらかの標徴、または宇宙の究極原理とみなされるある存在の顕現。

5. An image or symbol of a deity; idol

神のイメージもしくは象徴；偶像。

[OE]

表　２．　「God」

God[9]　「大英百科事典辞書」

The one Supreme Being, selfexistent and external; the infinite creator,　sustainer and ruler of the universe: conceived as　omnipotent, good, and almighty.

ひとりの崇高な存在、自ら存在し、外界にあるもの；　無条件的創造者；宇宙の維持者で支配者：　全知、善、そして全能として考えられている。

３．２　神や究極的実在性を考える「モデル」について

神あるいは究極的実在性ということを考えるとすれば　思考のうえで、そのモデルとしてどのように構成されるか？　そもそも「モデルとはなにか？」という問いから始めてもよい。そういうことをかんがえる哲学レビューが　2014 年 8 月 14 日にアメリカで出版され、その丁寧なブックレビューがノートルダム大学のブログである哲学レビューに掲載された。この本は 1000 ページにおよび　これの新刊著作のレビューアとして　努力の限界を超えているとして　著者の章立て構成に不満を呈していて　興味深い。

以下　３．２．１にこのレビューの概略を記述する。また　３．２．２には、そのブックレビューアが積極的に評価するパームキストによるカントの超越との上限的な理性境界の概念の位置づけに触れる。

３．２．１　超越者（または神）のモデルについて

以下　概要を説明する。

１．　アリストテレス、アウグスティヌス以来の古典的神の「モデル」

２．　近代哲学時代の神／究極実在性の「モデル」について　結局はカントの二元モデルに

落とする。その内容は　ひとつ、超越的な認識能力の付与という意味で人間の理性思考を可能にする「可想体」と　もうひとつ　先験的直観から「経験」を経て、世界の概念秩序を知る場である「可視体」（もしくは「現象体」）によって、全体によって　超越的存在をみとめる。これを認めないと西洋哲学がはじまらないともいえる。このような考えを　Open Theism のモデルとして紹介している。すなわち、　かれらの表現では「この世界をこえるもの」と「世界のなかに内在する超越者」のふたつをもっているという神学論となる。

３．　上の Open Theism モデルが　あらためて登場してきたのは、神の全知全能に対する修正を人類が必要としているという観方が基本にある。　素朴にあのホロコーストが全知全能の神であるならするはずがないという意識が人間の側にある。　むしろ「悪しき超越者」（悪魔）の存在の方に　モデルとしての明解性をもとめる。

４．　Process Theism モデル。ここでは「全能の神」ではあるが、「あえて全知」ではないという考えである。たとえば　人が理不尽な苦難にたいして戦う。これは自由意志空間を認める Process Theism または　Panentheism　の「モデル」として解説している。　このモデルは Whiteheadian/Jamesian theisim とも呼ばれている。

５．　さて、モデルとはなにかと　いうことになる。　神や究極的実在について、ある指標になる記号ないし信号記述をもちいて形而上学的（思考のなかで）に極限的実在の理屈の帳尻をあわせる表現体であるとしておくと説明する。かれらはこのモデルをもって、キリスト教に限定せず、ユダヤ教、モスリム、多神教、無神論までに及んでいく。

６．　筆者がとくに興味をもったのは、上気３．で　バーミンガム大学の哲学教授のユウジン・ナガサワの存在である。彼については　さらに調べたいが、彼の「悪しき超越者」の概念に着目したい。また、

７．　「マリーの部屋」というのがある。　マリーという少女が生まれてこのかた色彩のないモノクロの部屋でそだち、そとを知らない。彼女は聡明で、世界を物理学的知識によって完全に理解しているという前提がある。ある日、マリーは部屋の外に出る。世界は色彩に満ちている。その結果　マリーは　どうなるかという命題である。経験として獲得した覚知の記述論理的な現象としての認識の不完全性を投げかけている。

８．　仏教における超越者のこともこの本はふれている。　密教のような言語以外の媒体をつうじて、超越者の認識の問題に注視していることを筆者は知る。人格性を仮定しない超越者の存在については、旧約理念で意識の深いところに刷り込まれた一神教からは距離感を率直にしめしている。超越者のモデルとしての思考の探求対象として位置づけている。

（なお、付録に上記レビュー（和訳）**付録　書評翻訳：Ｋ．Ｊ．クラーク「神および究極実在性についてのモデル」**を付す）

３．２．２　カントが考える価値認識の「上限境界線」

上記小節の項目２．で示すように超越者（神）のモデルを考えるときのカントの影響は大きい。これについて　この書では、ステファン・パルムキスト Stephan Palmquist の研究[10]を大きく評価している。　彼の指摘を以下紹介する。：カントの超越論的哲学は、ア・プリオリで構成的な判断力のもつ可能性によって理論的な課題を解く試みとして始まる。彼は、空間、時間、及び１２個のカテゴリー（秩序項目）によって、われわれが知ることができるこ

とと、できないこととの間の線引き、つまり超越的境界線を形成する。
そのような解を得たとして、どういう意味があるかについては、「この’解‘そのものはさらに、より意義のある課題にわれわれをひきよせるとし、いったい可能な経験的知識の外側の状態は何であるかという命題を提示するという。カントは、超越者、人間自由、不死の三つの人間理念をあげ、この理念を如何に検証するかが超越論的課題の形式を構成するとした。
一方、この理念を支える力である理性は、人間の経験的な知識の限界を超えたあるものを自然に探していくが、この場合、経験的な知識は、多様な事実に対して、それを一つに、なおかつ関連づけを試みつつ、この境界線に射像化していく。
つまり　人間の知識探求（認識）の目的論的な価値への意識は、この認識の「上限境界線」につねに注がれることになる。　古典時代以降の第一哲学である形而上学は、この境界線での射像を知としてを論理的に展開する学問としてきたといえよう。

４．考察　システム思考と社会倫理としての課題の切り口

４．１　「価値自由」（マックス・ヴェーバーの「価値自由」を連想して）[11]

この稿を起こした夏は、PC が virus に侵されて　この年になって二度も最初から OS の立ち上げに煩わされた。　こちらの注意をすりぬけるように、外から入り込んで、こちらが間違いを起こすようにクリックを誘導する。　そして絶え間なく　現れ、自分たちと契約すると PC の性能は回復すると促す。　気がついてみれば　落とし穴にはまり、　PC の操作応答が　急速に低下していることを知る。
＊皮肉なはなしが　こういうことで街のパソコンショップはお助けマンとして商売が成り立っている。　自動車に修理工場があるように　機械ものであるから、PC も修理工場があっても不思議ではないとおもうが、しかし　なにかが違う。　極端な引き合いであるが「おれおれ詐欺」との間に　同質のアナロジーのあるというおもいが走る。そして、ふとおもった；人類文明は地球環境危機によってではなく、情報カオスによって滅亡する。
＊先般、　渋谷での Raul Dufi の展覧会で　「電気の精」という屏風絵版にした作品を見た。曾てパリ博覧会での巨大なフレスコ画の原画らしい。
＊蒸気機関にはじまる紡織産業、道路、鉄道、橋梁、発電、自動車、ガス、航空そして通信などそれらを先導した科学者たちの群像が描かれていておもわず立ち止まる。　電気という科学技術とその進歩がもたらすことにたいして、夢をおおらかに描いている。この絵はたしか私が生まれた 1938 年であったとおもう。すでに世界は第二回目への大戦へとむかうころであるが科学文明に対して実におおらかである。まだ原子爆弾や原子力の利用は明示的には出ていない。
＊結局、科学技術は　機械化によって生産効率を向上し、市場資本主義を発展させた。また、科学技術の国家間での競争的進展が、とくに東方世界に対しての市場の拡大を促して、その圧倒的優位性が帝国主義支配を生んだ。　これが昔、高校で習った世界史の筋であった。
＊結果は悲惨な戦争を生んだという意味で　人類は物理的に、明示的な破壊を経験した。ア

メリカとソ連邦の二極の世界体制を形成し、やがて　アメリカという一極、そのあとイスラムや中国などの台頭によるつぎの世界制覇ステージを予見せしめている。
＊科学技術は、人間の意志実現のための経済そしてそれにともなう政治的な目的のための単なる手段と評価してきたので　これまでの歴史的な審判の場で　それ自体が　訴追をうけることは　なかったとおもう。
＊また、科学技術は、主権国家内で　合法的な存在根拠のもとにあったとも理解できる。国家間では　国際法のもとに合法化される。　各主権国家のもつ共有価値観が、ときに頑迷な、あるいは先鋭な民族主義や宗教主義によって　危機に瀕することは、周知のとおりであった。
＊二十世紀のおわりに、続く今世紀を中心として　情報通信技術、ナノテクノロジー、生命科学技術、および環境技術と置いたが、目下のところ、外れてはいないとおもう。

＊ところで、アメリカ一極でグローバリゼーション（グローバル化）の理念のもとに　経済は多国籍化した。　しかし　2001 年の９．１１による国際テロ化は　テロリスト糾弾を目的としてアメリカのアフガニスタン介入、およびイラク介入による紛争化で　結果的にアメリカの支配一極化の基盤をよわめたといえる。　新興開発途上大国の BRIC のブラジル・ロシア・インド・中国の四国、就中　中国の規模の急速な成長による経済的なプレゼンスと必然的な政治的影響行使欲が　これまでの単純な市場グローバル主義の限界を示した。（目下　オバマ政権の戦略不在による迷走？　もある）　TPP などは、アメリカの一極体制の再構築のための経済ブロック化を意味しているといえよう。（第二次世界大戦前の枢軸国封鎖のための経済ブロック化を思い起こすものがある）
＊、さてそこで　科学技術のもつ役割りは　さきの Dufi の「電気の精」の時代から、変わったのであろうか。
＊たとえば、現在の情報通信技術は、蒸気機関を代表する 19 世紀の産業革命での技術と本質的に何が同じで、なにが違うのか　文明意味論として　吟味しておく必要がありそうだ。
＊科学技術は　それを使うものの手のうちにあるということは　それ自体と現象上の性質からそれ自体に責任がないという論に反論できない。
＊一方　その技術のもつ固有の性質が　人間へのあたらしい効用をうみ、それが生活行動の変化をうみ、結果としてあたらしい価値観を生みだしていく。　それがまたひとつの社会に特徴的な現象を生んでいこう。　それは社会的価値観へと受容するための調整など　時間的なバッファー期間を経て、制度的な工夫、そして社会インフラの制度化へ至るであろう。
＊これらは　経済市場の競争では、人間自由意志による社会を創造するものとして積極的にチャンスととらえるか　ことのなりゆきをみて行動修正して、先にゆく先進グループに追従していく受容的にとらえるかでその後の経済的な格差がでてくるであろう。
　＊しかし、　市場原理の機構のなかで、問題対応的に考えていくとしても　この現象追従のボトムアップの思考と行動では　実務的な利害の調整としての概念にとどまり、問題先見的ではない。　そして、結局は　公共共有のための概念からうまれるべき構築的な問題対応の欠落となって表面化してくることを忘れてはならないであろう。それでいいのだという考えもあるが、知者の責任はおおきい。
＊筆者は　この論がこの段階にきて　マックス・ヴェーバーの価値自由（Wertfreiheit）に思

いを致さざるを得ない。　つまり　その科学技術やそれからの事象が　ひとや社会にあたえる　固有の意味と影響、ならびにそれから　生まれる価値の発生については　可能なかぎり、早い段階で　それを拾い上げ、分析しておく意味を見出すものである。
＊「問題の先見的認識」という意味での個別科学技術に焦点をあてた社会科学的な研究は意味あると考える。
＊つまり、「個別技術のもつ目的論的研究」であり、このエッセイの総合課題である’目的性の上限領域‘の研究である。
＊そして、また最初にかえる;「ふとおもった。　人類文明は地球環境危機によってではなく、情報カオスによって滅亡する」と。

４．２　「正しさ」について、特に超越論的な「正しさ」に関連して

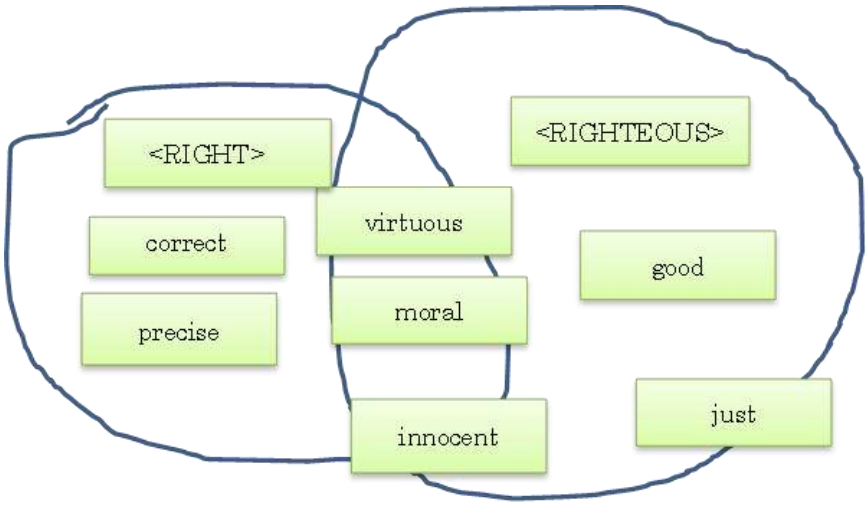
目的論における超越論的な価値について筆者の思考域に入る意識を中心に論じてきたが、ここまで来て、反省するのはここまでの思考展開の全体は、論理的な俯瞰に不足していることに気付く。なぜなら、そのような Objectivity というべき目的性（客観性）について、どのような内容項目があるのかが見えてないからである。　したがって、まず価値の判断である「正しさ」に着目し、それからみえる価値の位相をつぎの順序で述べてみたい：

４．２．１　「正しさ」の意味の確認
４．２．２　特に超越論的（宗教的）な次元で「RIGHT」と「RIGHTEOUS」について
４．２．３　「RIGHT」　と「RIGHTEOUS」について事例考察
４．２．４　「罪」に対する清算と「責任」について
４．２．５　この節のまとめ

４．２．１　「正しさ」の意味の確認

ここではきわめて素朴な出発として言葉の意味から入る。 [12] [13] [14]　ひとつの視点とし

図　５．　正義「right」　と　義「righteous」[15]



ては　超越的（宗教的）な意味までにいたる可能性があるので、旧約聖書に着目した。そのなかから　「正義」と「義」を選び、日本語と英語辞書類から同義語で抽出しその対比で、意味の関係構造から入った。図　５．はその結果の説明として、実践的な場の意味がつよい「RIGHT」の次元と　超越的（宗教的）場の意味の「義」の次元の「RIGHTEOUS」について説明図化したものである。

RIGHT の類語としては　ものなどの対象が‘ただしい’ correct, precise がまずあり　、つぎに道徳的に‘ただしい’virtuous, moral そして innocent におよぶ。また RIGHTEOUS の方は、価値意識として good, just そして innocent がならぶ。そして RIGHT と重なる部分の道徳的な部分で構成される。[15]

４．２．２　特に超越論的（宗教的）な次元で「RIGHT」 と「RIGHTEOUS」について

これは、人類が置かれている多文化的な背景があるのでこれに焦点をあてておくことは、重要と考える。図　６．は、多文化的な背景としては、一神教と多神教の二つの種類で、 人間への規範性については、思考や意識としての「内的」と行動・行為での「外的」の二つの区分でマトリクスとしてまとめた。ここでの視点は　一神教と多神教での「正しさ」についての位相についてみることを狙っている。

図　６．　　各宗教での正しさに対する規範領域

	主として内的（思考・意識に対して）	主として外的（活動・行為に対して）
一神教系	キリスト教(プロテスタントティズム)	ユダヤ教 イスラム教
多神教系	(日本)　禅宗 儒教朱子学	仏教 (真言・日蓮等) 神道 (中国)　儒教

[15] ひとつ　注目するのは innocent の部分で、日本語では　「無邪気」「無垢」という意味であるが、旧約および新約の世界では、原罪に犯されていない純粋な「義」という点で、特別な地位があるようである。

また、その説明として　各宗教を上げて、マトリクス上の位置を暫定的に置いてみた。[16]　問題のポイントは　思考（意識）と活動（行為）について超越的なものが人を作用する特徴の構造を見ようとするものである。マトリクス内の各要素の位置については筆者の独断によるものであり厳密には異論があるかもしれないことを付記する。宗教によって　政治と宗教の分離（政教分離）と非分離の違いがあるが　ひろく、社会的（政治的）正義と　宗教的正義を　思考律則か活動律則かで　相互の違いを吟味し　相互の違いを理解しておくことは、具体的な事象の分析が必要なときに意味がでてこよう。

４．２．３　「RIGHT」　と「RIGHTEOUS」について事例考察

図７．に、ドイツの戦争責任（ドイツモデル）の取り方を取り上げる。[17]
これは　現実の社会系の問題に超越論的（宗教的）なものが　どのように関っているかを考えるためにドイツの哲学者ヤスパースが考えた図式である。
＊ヤスパースは罪の種類を　刑法的、政治的、道徳的、形而上学的の４つに分類して、その責任がどこにあるのかを取り上げた。そして、だれが裁き、だれ裁かれるのか考える。
＊前者で、刑法と政治は、国家であり、その背景根拠は国際法となる。道徳と形而上学の罪に対しての裁き側は超越的存在を想定している。
＊罪を裁かれる側として　特徴的なのは刑法ではすべて　個人であって、主権を委任された国ではないことに認識をあらたにする。個人から主権を預かってる組織全体である国は、被告にならない。
＊　道徳的・形而上学的な責任が、超越論的な責任としてヤスパースは位置づけている。特に　「形而上学的な罪」は　‘innocent’との意味と関連して、日本人の筆者には　理解しにくいところである。　日本人の超越的な感性からみると　道徳的罪の方にもっぱらの関心がシフトするのではないであろうか。目的論的視点からみると意識の超越論的境界であり、一種の upper boundary 概念として理性による思弁の上限を表出している。

図　７．　　戦争責任について
　　ヤスパースの　責罪論の考え方を使って考える図
＜ドイツモデル＞で例示した

ヤスパースの上げる罪の種類

罪	刑法的罪	政治的罪	道徳的罪	形而上学的罪
強く関連する言葉	Justice	Virtuous	Moral	Innocent
裁く側	国家	国家（実は戦勝国）	良心	無力の自覚
裁かれる側	集団　×	△	×	×
	個人　○	○	○	○

４．２．４　「罪」に対する清算と「責任」について

以下は　オーストリーの社会科学者であるマックス・ヴェーバーが　指摘する　二つの責任倫理に注目したい；

I　＜方向性倫理＞

共同体の方向性を示す責任倫理（Gesinnungsethik）

II　＜結果責任倫理＞

共同体の求める結果に至らしめる責任倫理(Verantowortnungsethik)

これを　罪への贖罪という視点つまり責任倫理の帰属先を考えてみよう。時間軸として（過去⇒　現在）と（現在　⇒　未来）を選ぶ、贖罪を追う側の人間として　少々乱暴な区分であるが、‘戦争を知っている世代’（その戦時に国民（主権者）としてあった）か、‘戦争を知らない世代’（戦時には成人ではない、あるいは生まれていない）の２ｘ２のマトリクスを考える。そのうえに、方向責任と結果責任の２項目についての責任の帰着先を入れてみよう。戦争に時代に成人として生きていないのにとる責任が、ヤスパースのいう「形而上学的」責任として　先祖の罪の相続をしているとみる考え方である。

図　８．　２つの責任倫理と　（過去・未来）への責任について

ドイツ・モデルとしてマークしてある。

記号　　I　＜方向責任＞　（Gessinnungsethik）

II ＜結果責任＞　（Verantwortnungsethik）

		＜罪＞		＜責任＞	
		過去⇒	現在	現在 ⇒	未来
戦争	知っている	I	○	I	○
		II	○	II	△
	知らない	I	×	I	○
		II	×	II	○

図　８．はドイツモデルに対しての筆者のマークしてみいる。結果として　‘知らない世代’は　未来での責任からは免れえないことになる。

４．２．５　この節のまとめ

＊１　「正しさ」は　意味論的に多様である典型的な　ことばであることにあらためて関心

をもつ。　ものごとの価値基準として　万人が関心をもつ価値である。しかも　人間の間の関係や　超越（者）と人間の関係で　相互に意味論上のズレによる混乱がおきやすいという印象をもった。
＊　特に　「RIGHTEOUS」は　一神教の神と人間の契約履行上の「正しさ」(「義」とも呼ばれている）であって、　「RIGHT　」と、どのような政治や社会生活上の「正しさ」との点で　意味論上の差はおおきい。
＊　しかし　＜方向性倫理＞として、　将来のための責任をもって考え　事に当たることには　何らかの権威が必要であろう。　道徳（倫理）上の「裏書き」として　「RIGHTEOUS」が世俗世界にとって必須条件になるといえよう。宗教を別にしておき、理性の力を基盤に考える場合は、このための権威を「第三の審級」とも社会学では読んでいるらしいが、「審判のいる言語ゲーム」として　価値前提を共有されると考えられないかおおきな命題である。
また、多文化的な背景間での　価値の共約不可能性への解決のための命題でもある。

＊　非キリスト教世界で　この「裏書き」が　使えるかどうかは　保障の限りではない。ひとつのヒントとしては　「理性」に対する信頼を共有するということが考えられる。　これは科学的思考や行動のもつ結果への信頼性が国や宗教を越えて　共通であることが「裏書き」として共有していこうとする考えである。　つまり「理性信仰」がいかなる道筋になるかの命題である。
＊この場合　ものごとの調和など　「感性」への再評価が必要であろう。ここでの検討はできないが　カントの提唱する「実践理性」と「感性」との緊張感が　価値の基準として　ふたたび上がってくると考えられる。つまり感性~理性連合の「知性信仰」といっておこう。
＊一方　＜結果責任＞については　日本人の特質を際立たせるものであり、おそらく世界に誇ってよいものであろう。　「阪神・淡路大震災」(1994）ですでにその結果の復興処理に世界的な評価をもたらした。　そして　いま　国民一丸となって、とりくんでいる「東日本大震災」復興事業も　試行錯誤もあるが、復興の最終の目途も見えないといわれている。楽観は許されないが、特に　この国の国民の精神のしなやかさとして、たとえば、震災直後からの　節電省エネルギーなど　従来　言うべくして為し得ない社会的な壁をいっきにクリアした実績をみるにつけ、かならずや　事業を完遂されるであろう。おそらく人類史上の快挙として、結果としては世界貢献を達することを念願したい。
＊日本が　平和に生存していることは他国との交易によってあることであり、日本一国の能力だけによってではないということは言わずもがなであるが、そのための方向性責任への認識が必要である。　その意味でこの次元での方向性をみていくことが不足しているに見えるが、日本人が能力がないのではなく、抽象レベルをふくめ徹底思考し　命題化として表現するための　努力すべきことを指摘したい。

４．３　日本および日本人に　課せられた責任倫理としての「方向性」思想[16]　（広松　渉等編[18]

＊１　責任倫理について、　ふたつの概念があることは述べたがここで、この小節の視点のために、以下の図　９．にて説明する。
＊一神教の視点からはいる。ユダヤ教は　もし律法（ルールブック）をまもることが、神からの加護をうるものと理解してしまうなら　きめられたことを筋をとおして守り抜く意味でII への責任倫理が中心であるのではないであろうか。

図　９．　心情倫理と責任倫理

I　共同体の方向性を示す責任 （倫理） 心情倫理 Gesinnungsethik (応答責任 reponsbility (?)) (semantical　意味論的)	II 共同体がもとめる結果 にいたらしめる責任（倫理） 責任倫理 Verantwortnungsethik (結果責任 accountability) (pragmatical　語用論的)

＊キリスト教は　ユダヤ教の律法からの開放として　「隣人愛」の信仰を提示し、すぐれて個人のもつ心情（自由）への道へと転換を媒介した形跡が哲学的に指摘されている。
＊その意味で　すこし話が飛ぶが、信仰的な「隣人愛」が世俗社会の規範として供され、　それが、抽象的な「普遍性」を求めるという思考方式が生まれたこと、そして、それがさらに個人、集団、社会、国家の形成運営を　対象化した　思考言動の動機をもたらす、つまり上記　I と II の連成構造となったのではないかと考える。　もちろん　個人の自由と共同体の方向性についての緊張感はおおきい。
＊ところで、日本人は　世界に向かっての指導理念をみずから生み出すこと（上記Ｉ）は　これまでの歴史のなかでは　実績が少ないようにおもう。苦手であったのだとおもう。
＊それでも、片鱗はあったかもしれない。　日本の製造業での戦後の「品質管理方式」など

[16]課題；　日本および日本人に　課せられた責任倫理として「方向性」思想
～多神教（日本人）の倫理と　一神教（キリスト教）の倫理背景の違いを克服して～

この課題の動機は　東京工業大学世界文明センターでおこなわれたシンポジウム「やっぱりふしぎなキリスト教」に出席して、その議論のなかで　特に「責任倫理」というキーワードに触発されたので　筆者の所見を綴ったものである。

は　これに表徴するものであろう。しかし、この世界ではまことにプラグマティックであり、つまり技術的次元であり、そのミッションの範囲で完結させるといえよう。　品質の哲学や社会科学として、この知的フレームを概念俯瞰して理論理念へと抽象し普遍化（Allgemein）を目指さなかったといえる。[17]

＊また　コンピュータハードが世界の群を抜くものでありながら、IT やモーバイルへの展開をみるとそういう意味で　日本は特殊　（Besonder）に留まっている。　それは、その場に定着していることの倫理感が精神土壌のもとにつよくあるという特徴としての認識でもある。

＊現在の重い課題として、東日本大震災と福島原子力発電事故は４年を経て、　その復興事業は難攻している。　事態の深刻さからみれば、叱責をうけるかもしれないが、自然環境の保護と自然災害からの社会への安全社会構築にむかって、日本人が　はじめてもつ人類社会への生存についての普遍的思考からの回答を出す機会ともなっている。　上記の　I について　共同体の方向性を示す責任倫理（心情倫理 Gesinnungsethik）が　その出発点になると思うものである。

＊ところで、　多神教のひとつの流れにある日本では　伝統的につぎのような図式で　受け止めて（理解）　それにもとづく精神的展開が　ひろく受け入れられてきたとおもう。[18]

（人間が現に生活している環境、環境に接している人間そのもの、土着の神)

＝　自然

＊一方、旧約聖書の創世記では

神　　―（人間）　　―自然

の図式として人間が自然を神の代理支配の責任があるとしている。　この自然観は　一神教（ユダヤ教、キリスト教、イスラム教など）の世界にいるひとびとには、彼らのなかの意識に馴染み、ふかく刷り込まれた基本的な態度であると理解している。

＊たとえば、自然理解への一神教と多神教背景の文化での相互の違いについて　すでに自らの歴史過程で、克服し、多文化融合的な精神文化がある。われわれは　この精神的含意を共通言語としての哲学や社会科学で、論理記号化することは、価値間の共約の場を与えるであろう。このような筋道（パラダイム）での目的性（客観性）の価値哲学を　生み出す資格があるのではないであろうか。

＊目を転じて、日本は、すでに上記　II（結果責任倫理）については　とくに、科学技術、工業立国を基盤としてのグローバル社会での功績と日本の存在（Da Sein）の認知を享受しているともいえる。

＊明治以来 147 年の近代国家化への軌跡、また第二次世界大戦後 70 年のいま、アメリカの力の傘の下とはいえ、半世紀以上に亘っての直接他国と交戦をしていない平和な経済国家としての国の経営には　実績としての評価（II の結果責任）を行っておく価値があるとおもう。殊に　その国の経営の基本のなかに　日本人および社会がもつ　特異的ではあるがそこに形

---

[17] ヨーロッパが日本の品質の哲学を不在と認識して ISO9001 などの品質保証認定で世界を制御したことはあまりにも有名である。

[18] 筆者は　この４年間、橋爪大三郎教授の東工大公開講座「旧約聖書を読む」から学んだことでもっとも印象的なことのひとつは特に　自然観についての理解の仕方であったとおもっている。

成熱（latent energy）があったとすれば　この構造メカニズムの　普遍化・理論的外化をする意義はおおきい。　日本の外に視野おいても、これをおこなうための哲学的・知的解明への期待もおおきいのではないであろうか。

＊現代は、グローバル化とはいえ、基本的には米欧的な指導理念が基礎になっている。　とくに　日本が　先進国世界のなかでは　個別課題的に限った関心（concern）と関与（commitment）をし、実績（contribution）はそれなりにしてきているとおもう。しかし　率先して、ものごとの初期段階から積極的にうごき、発信するよりも、自らを　右にならへ的な存在として置くか、あるいは　お付き合いのよい、気だての良い「なかま」を以って、やがて来る予定調和（？）のなかに身をおく性向の方がつよいように感じている。　グローバル社会において、平和共存理念を実践的概念へ‘あぶりだし’、つまり日本人としての「実践理性」として考え抜かれた定言命題の提案が　問われているようにおもう。

＊以上　責任倫理について　I　（「方向」への責任）と II （「結果」への責任）について、述べ、とくに　I （「方向」への責任）についての想いを強調する結果になった。

５．　結言と謝辞

本報文は　総合知研究会の定例研究会にて　2014 年 9 月および 12 月の２回の例会さらに 2015 年１月の計３回において全 10 時間におよぶ発表の資料原稿から作成されている。また、この発表の各部分は　また、準備作業として、つぎの場で並行進行した。すなわち、2014 年の夏から 2015 年 3 月の間、以下の小エッセイを公開発表している；

１．東大 OB ネット「早起き同盟」荒井トピックで掲載「徒然こと」。

２．Goo ブログ「朝日記」での掲載エッセイ。

３．NPO 法人「HEART の会」会報への投稿エッセイ。

特に　章２は、HEART の会　網屋慎哉氏とのカントの認識哲学のもつ現代的意味について往復書簡論議を重ねたが、その内容を氏の了解を得て、その形式を保ったコミュニケーション方式としておいた。氏には　協力を謝する。また、章１は　本報文が「目的関数の上限域」ということとの意味論に近い著書が出版された：　古田博司　ヨーロッパ思想を読み解く～何が近代科学を生んだか～　ちくま新書である。この著で　超越論の現代的意味を論述しているのを知り、AMAZON ブックレビューへの筆者の投稿したが、これを本報文の「序論の位置づけに使わせてもらった。読者へのこのテーマへの親近感をあたえるならば成功である。この著を紹介くださった総合知学会会長　小松昭英氏に感謝する。章３は、超越論を
論ずるときに、おそらくキリスト教文化圏では、宗教的に共有している次元で論がスタートするが、日本では、超越論への境界線が不明確に留まる。ノートルダム大学の哲学レビューのホームページが、「神および究極的実在性についてのモデル」というアメリカ哲学会の大プロジェクトの報告著作のピアレビューを手にいれることができ、「神のモデル」ということで本報文のなかに位置づけた。これで、境界線が見えたかどうかは残念ながら言えないが境界線を見ようとする問題が、現代社会において重要な定言命題であるという発見はあったとおもう。これを章４　考察　システム思考と社会倫理としての課題の切り口において境界線からの科学的目的性（客観性）の意味を考察したのでご批判をいただきたい

４．１　「価値自由」（マックス・ヴェーバーの「価値自由」を連想して）

４．２　「正しさ」について、特に超越論的な「正しさ」に関連して

４．３　日本および日本人に　課せられた責任倫理としての「方向性」思想

今回は紹介していないが、「Scientific Objectivity；科学的目的性（客観性）」についてのスタンフォード大学の哲学百科にかれらの研究プロジェクトがあり、本報文と意図を同じくする重要定言命題として投げかけていることを付記したい。

また、本発表に長時間にわたってきちんと付き合ってくださり、議論をしてくださった当該学会のメンバーの友情を感謝する。これが、本研究の思考展開への貴重な意見であったことを記す。また、この研究の過程で貴重な意見を与えてくれた旧知の友人たちにも謝意を表したい。全体を通じて筆者の思考展開の基礎的知識素養は、東京工業大学名誉教授　橋爪大三郎氏の公開講座「旧約を読む」での自由質疑とレポートでのご指導によることをあらためて謝意を表するものである。本報文の内容的および形式的構成な問題があるとすれば　すべて筆者に帰するものである。終わりに、書斎に閉じこもっている筆者をしずかに見守ってくれた妻敏子ならびに家族・一族に感謝する。

付録　書評翻訳：K．J．クラーク「神および究極実在性についてのモデル」[19]

書評ジャニン・ディッラー、アーサ・カッシャー（編）　2014 年 8 月　スプリンガー

書評「神および究極実在性についてのモデル」

書評者　ケリー・ジェームス・クラーク（グランド・ヴァレー州立大学）

翻訳　　ヤスマサ・アライ（荒井　康全　Yasumasa Arai）　2014/10/23

この本を読み、レビューを書くことから、評者は何を学んだか？　聡明なナンシー・レーガン Nancy Reagan 流なら：“まず No!です”となる。　NDPR は、1000 ページの 100 の異なるエッセイがある本をレビューすることか問い合わせてきた。　そして、まさしく　No!、と答える。　これは　自分の新しい哲学であるが、　No.と答えなかった。それが結果的には自分が想像しえた以上に多くを学ぶことになった。たとえば　ヘーゲルの万有内神論[19]、最高度に明快な道教[20]、および神についてのアルドハナリスバレ Ardhanarisvara の神の雌雄両性具備モデル[21]などである。つまり、自分が、欲する以上に、または　必要以上に、学んでしまったことを言っていることになる。

この本の目的は、米国哲学会（APA）の会議でのワークショップとして始まったのであるが、“主要な哲学における神のモデル”（1）を調査し、批判して、相互に比較するものであった。仮にもし、それだけで十分でなければ、相当する他の究極的実在をも含めてよいとしている。それらを検討し、同時に理解することにあった。この本は調査するという点では最強であるが、担当した著者達が、自らの見解を顕し、また　スピノザ Spinoza、アル-ガーザリ Al-Ghazali やヒューム Hume など歴史的に著名な思想家がもつ神のモデルを詳しく説明する

[19] Hegelian panentheism
[20] Daoism
[21] androgynous model

となると、決定的にその　批判、比較、および概念の明解さにおいて　弱いといえよう。

この本は、宗教というよりむしろ概念モデルを中心に編成されている。たとえば、古典的有神論[22]では　アリストテレス派 Aristotelian、　ユダヤ教、キリスト教、イスラムの神の概念についてのエッセイが含まれている。　万有内在神論[23]に関する節では、クーザのニコラス Nicholas of Cusa、カント Kant、シェリング Schelling、ヘーゲル Hegel、パース Pierce そしてヒンヅーの神々の背景からラーナーRahner に関するエッセイがある。 残りの節で　概念基礎 Cconceptual Foundations, 新古典有神論 Neo-classical Theism,　オープン有神論 Open Theism, プロセス神学 Process Theology, 存在の神学(基盤 - はじめとおわり)Ground, Start and End of Being Theologies、究極的単一性 Ultimate Unity、神の多重性 Divine Multiplicity、無限ということの自然主義者モデル Naturalistic Models of the Infinite、またモデリングとして捉えることに抗するものとして：否定的神学 Negative Theology、神およびそれに代わる究極実在の多様化 Diversity of Models of God and Alternative Ultimate Realities　および実用的包含 Practical Implications があげられる。(ここでは神と女性人権概念についてのパメーラ・スー・アンダーソン Pamela Sue Anderson があげられているが、なぜってここに入ってきたのか不明である)

モデル[24]とは　すべてのことに対して、その隠喩[25]を通しての究極実在[26]についての本質のつじつまを吟味することにはじまり、その結果、非決定的ではあるが究極実在についての指標的記号表現[27]に至るものとして、広く構築されたものである。　かくなるモデルが　広く構築されたとして、神および世界の究極実在の主要なモデルはどんなものであるか、また　歴史的にもそれはどうであったか？　キリスト教の哲学的神学論では、かなり様々なモデルが構築されているが、この場合、ひとは、キリスト教的モデルを期待しているかもしれない。

この本の著者であるディラーDiller とカッシャーKasher は、もともと一神教神学モデルを研究していたが、多神論[28]、非有神的宗教[29]、そして　無神論[30]を含むものに広げていった。かくして　大括りの題名となった。　一つだけ確かなのは、この本は百科であるということである。　評者は　このすべてを論じないが読者に全体としての　この本の強みと弱みに沿って、意味あるところを伝えてみよう。

冒頭の概念の節では　モデルについてよりシステマティックに論じて、つぎのような質問群の投げかけをしている：神／究極実在の領域を「思考の場」[31]としてみて、如何にして、これを地図モデルするか（モデルとは何か）？　　神／究極実在の領域を対象とする「思考の場」のマップとは何であるか（われわれは、その可能性を示すための徹底的に拾い上げた項目内容を十分に持つか）？　　神／究極実在の領域を「思考の場」のマップのなかで　どこ

---

[22] classical theism　古典的有神論
[23] panentheism　万有内在神論
[24] model モデル
[25] metaphor 隠喩
[26] ultimate reality　究極的実在性
[27] indexical signs 指標的記号表現
[28] polytheisms　多神教
[29] non-theistic religions　非有神的宗教
[30] a-theisms　無神論
[3131] terrain　地勢　思考の場

に我々の家を建てるべきかを知ることができるか（可能性のなかで　どれが真であることを知ることができるか）？

ロバート・ネーヴィル Robert Neville は、新カント派[32]のながれのなかで、究極実在は決定論的に不可能であり、したがって人間によってそれをモデル化（つまり決定すること）はできないと論じた。　そうなると、ひとはつぎのように考えるであろう；なれば--人々や、国についての（共通）意識やなんらかの表徴を意味する--決定論的な実在性についてのモデル(世界内での要素)を使って、究極実在性へのなんらかのサインもしくは指標として、役に[33]たたせるようなものはできないか、そして、そういう要求は、どのようにすれば実現できるかということである。　ローレンス・ホイットニーLawrence Whitney は、この究極的実在性についてのネーヴィル流の懐疑主義から、究極的な実在性の本質についてのカントの不可知論に同調している（しかしながら、ホイットニーは　非決定的な実在性とわれわれが決定できる世界との境界をモデル化することが可能であることを了承している）[34]

ありがたいことに、ホワイトヘッド Whitehead は　神の性質についての項目として、永遠性、時間制、意識、世界の知識、等、３２の可能な項目があると論じた。　ドナルド・ヴィーニ Donald Viney が、ホワイトヘッドは、彼の想像力の失敗から神について可能な性質のほんのわずかな項目のみに限っていて、たとえば神の創造性などが欠落しているとし、極限実在性について、256 の項目を挙げた。　ヴィーニは、究極的実在性について考えるための未だ取り上げていない項目[35]を上げることになった。マイケル・アンソニーMichael Antony はつぎのような賢明な論述をしている。すなわち、ひとには、究極実在性についての知識を要求する資格があるかもしれないこと、さらに　われわれが知ることができるということを希望することは理に適っているというものである。　われわれはまだモデルとはなにかという実感を十分にもっていないが、すくなくとも 256 の実在性のための項目があることならびに、もしネーヴィルとホイットニーが間違いであるならば、それらのどれが正しいかを知るかもしれないこととなる。

古典的有神論[36]

R.マイケル・オルソン R. Michael Olson は、アリストテレス神学についての明敏な議論（最初に動かしたものであって、最終の段の原因としてそこに留まる者[37]）し、それを受けて、エリオット・ドルフ Elliot Dorff が、ユダヤ教の偶像への禁止を我々に喚起した。偶像への禁止は　メモニデスの否定神学[38]（および　神をイメージすることの問題と予想）を動機付けるものであることをも喚起した。

ジョン・ピーター・ケニーJohn Peter Kenny、キャサリン・ロジャース Katherin Rogers、ロバート・ケネディーRobert Kennedy、およびエリック・シルバーマン Eric Silverman は

---

[32] neo-Kantian　新カント派
[33] could possibly serve as signs or pointer to
[34] (though we can, Whitney contends, model the boundary between ultimate indeterminate reality and our determinate world)
[35] "unexplored alternatives" for thinking about
[36] Classical theism　古典的有神論
[37] a first and unmoved mover　最初に動かしたものであって、最終の段の原因としてそこに留まる者　（運び屋）
[38] Maimonides' negative theology

アリストテレス派の古典的な神に　われわれを連れ戻す。これらはアウグスチヌス Augustine、アンセルム Anselm そしてアキナス Aquinas の世界であり、不変の[39]、無時間的永遠[40]、苦痛を感じない[41]、完全で[42]　そして　たぶんもっとも基本である単純[43]にあるとしている。　アル-ガザーリ Al-Ghazali とイブン・ラッシド Ibn Rushd は　ともに　アリ・ハッサン Ali Hasan に従って、積極的コーラン神学が超越的であることを進めるために戦った。かれらの主張は超越性を肯定し、同時に擬人化主義を避けることにある。

我々は、ギリシャ、ユダヤ教、キリスト教とイスラム教の四つの伝統を持っており、それらは　形而上学的で、なおかつ神学的な関心と洞察（知性）を共有している、したがって、大まかに言えば、いろいろな点で、神についての単一で、古典的な想念[44]に収束している。そして　なお埋めがたい相違ある、それは、概念と価値についてのそれぞれの成りたち易さ[45]とそこから生ずる相対性に関するものである。　認識上の相違はともに大きい。　実在性をどのように知ることができるか？[46]　アウグスチヌスとアル - ガザーリ Augustine and al-Ghazali の「経験」、アウグスチヌスとアンセルム Augustine and Anselm の「祈り」、アンセルムの「先験的の論議」、すべてのひとの場合ように「後験的な論議」、アリストテレスを除くすべてのひとの「書きもの」、後述するがジョン・ビショップ John Bishop のように「なにもない」、また、後述するが　ウィリアム・ジェームズとビショップ William James and Bishop のように「実際的」、そして/もしくは　アル - ガザーリ al-Ghazali のような「神秘主義」か？　超越性は神について、人間からのいかなる理解を超えるので、その結果、神は、何であるかについて、問わせない何かであることを人間が知ることであるのか？[47]　そして、それでも、神学的懐疑が避けられないと考えるなら、人間の概念、イメージ、そして隠喩から、どのように人間ではない存在の実在性を把握することができることになるのか？　これらの種の項目は各節で取り上げられるが、掘り下げは　ほとんどされていない。

新古典有神論と　オープン有神論 Neoclassical and open theism.

これらは完全な存在を神学的に肯定する一方、偉大な創造の性質について、正確なスペックが拒まれる。この巻のベスト論文のひとつは　ユージン・ナガサワ Yujin Nagasawa のものである。この論文は悪魔の問題をベースにしていて、アンセルムの全的（全能として、全知として、全善として）な神[48]を否定する。むしろ　（神は　知識、力、そして善意の最大限的な整合をもつもの）つま　り‘最大限’の神[49]としている。　一般的に、非古典有神論者 Non-classical theists は、好んで、悪魔の存在を前提に、さまざまな問題が動機付けをする。

---

[39] immutable　不変の
[40] timelessly eternal　無時間的永遠
[41] impassible　苦痛を感じない
[42] perfect　完全
[43] simple　単純
[44] notion　想念、概念；観念、考え、意見；意図
[45] plasticity　造形性、柔軟性　（成りたち易さ）
[46] How is reality known?　実在性をどのように知ることができるか？
[47] entailing that God is the something we know not what? 神は、何であるかについて、問わせない何かであることを人間が知ることであるのか？
[48] OmniGod (God as omnipotent, omniscient and omnibenevolent)
[49] Maximal God (God has a maximally consistent set of knowledge, power and benevolence)

完全に善なる神がその主権のもとで　如何にしてホロコーストを　みずからの意志とし、なりえたであろうか？　　また、完全な全の神が如何にしてホロコーストを予知することができたのか、そして　それを止めることをしなかったのか？　オープン有神論者は　神による細かな節理を拒絶する（神の究極の意志はすべてに貫く）　そして　古典有神論での神の徹底的な事前知識をも拒絶する（そして　デイビット・ウッドラッフが議論するように、神はリスクを取る）。 アラン・ローダ Alan Rhoda は　オープン有神論はプロセス有神論 Process theology よりも神の力のモデルとしてより適合をあたえると評している。

プロセス神学 Process theology および万有内在神論 Panentheism

評者は　プロセス神学について知識が乏しかったので、この説に一番興味を持ったと同時にフラストレーションをもっとも感じたという。ローランド・ファーバーRoland Faber の序論で純粋経験にもとづいての　ホワイトヘッド/ジェームス有神論[50]を読者に導入的な説明をしている。　ジェームスの有限有神論 Finite theism[51]は、ジョナサン・ワイデンバウム Jonathan Weidenbaum によって　人間の自由のための形而上学的な空間を生むものである。このようななかで、人間は苦難に対して、ときに止むを得ない戦いの動機付け、力が与えられるという。フィリップ・クレイトン Philip Clayton は、万有内神論[52]への序論で、どのようにして、神が　内的性[53]（世界は神のなかに含まれている）と同時に、超越性[54]（神は世界を越えたものである）の両性であることが可能であるかを考察する。

ステファン・パームキスト Stephen Palmquist は、カントの若年期に、教会でときどき説教をしたという後年のカントらしくない小さな例をあげて、彼を万有内神論者として紹介した。そして　カントが明示的に神を信じると告白していること、および将来において　自身の目に曇りがないよう護ってもらうべく告白しているとした。カントが万有内神論者であるか、ないか、パームキストは、カントが有神論ではないという当世風の説に反対している。

グレン・マギーGlenn Magee のヘーゲルに関するエッセイはヘーゲルが、万有内神論者というよりプロセス有神論にみえるようにしている。(ここのふたつの説での他のエッセイをすべて読んでも　評者はその違いを理解することができないことを告白する)。パース Pierce の“よじれた新教説”[55]を別にすれば、ジェフリー・カッサーJeffrey Kasser は、パースの宗教的宇宙論は魅力的で、納得いく図式を提供しているという（そしてそれがつまらない単なる後知恵ではなく、広く受け入れられる哲学的見識であると紹介している)。　プロセス神学思考のための概念問題のひとつとしてつぎのものがある；もし経験がもっとも基本的に存在するものであるとすれば、　われわれは如何に　自分という人間の経験を通じて、神の実在へと到達するか？

書評者の「閑話休題」

たとえば、どの哲学者がこの本から　データとして活用できるであろうか？　ここでの論

---

50 Whiteheadian/Jamesian theism
51 James's finite theism ジェームスの有限有神論
52 panentheism　万有内在神論
53 immanent ("the world is contained within the divine")
54 transcendent ("God is also more than the world").
55 〔神学〕ネオロギスムス, 新教説《ドイツの啓蒙主義神学の一傾向で, 啓示内容を理性的真理に限定した》.

旨は　純粋の経験のものから、先人の教えにもとづく幅広いものとなっている。　モデルについて語ることが、どのようなことに役たつのであろうか？　モデルを語ること自体が、人間の思考の質を上げることになるのであろうか？　早い話が　この本の目的は何であるのか、そして　目的に達したのであるか？　　われわれは　この本のどこに焦点を置いたらよいのか？　この本の 500 ページに取り組んだ終わりに、この本お目的が何であったかを語るに評者は、自信喪失している。なぜ　各執筆者は　この本のはじめの章にある概念基礎に関係づけてエッセイを書かなかったのであろうか？　各章の目的は、その筆者の究極実在性のモデルをよく擁護したとしても、全体のなかでどうであったのであろうか？　とはいえ、この本の前半の部分は　一神論について、今日の神のモデルについて厳密ではないが、さまざまなモデルを紹介しているので、ひろく理解するためにはよい案内であるとおもう。　第 7 節には　ウェズレイ　J. ワイルドマン Wesley J. Wildman のエッセイで、神人同型説的モデル[56][57]についての批判的論述をしている。　ひとつは　隠喩的なモデルの批判であり、もうひとつは、効用と内的反省でのモデルの限界にかかわるものである。

残されたエッセイでの思想をまとめて

レヴィナスの非存在神から[58]　イブン・アラビ　Ibn　Arabi の究極者の究極モデルまで、これらのエッセイが何を言おうとしているのか理解するのは難しい。　そして　ここから共通のテーマを見つけ出すのも難しい。　エディターたちは小節別の担当になっているので、“存在神学での基盤、開始および終結”[59]といっても、　それぞれの小節で　存在の開始、存在の終結、存在の開始と終結と内容が並んでしまう。

ティリッチ Tillich は、かつて”神は　神をつつむヴェールの一部を空けることによってのみ、彼自身を顕すと説教し、彼の“存在の基盤”[60]という言い回しのもとでかれの見解にヴェールを掛けたてている。彼の見解は何ら惑うことなく　有神論的、理神論的[61]、汎神論的[62]、万有内神論的、及び無神論的に、さまざまに翻訳されてきた。存在の基盤神学の（控えめに見ても）曖昧な言語を　誰が首尾よく明確にできるかは、評者自身確信がもてないという。率直に言って、消極的神学論のほとんどは　掘り下げに底が浅く、反省して思いめぐらしても　そのように見える。　だれか　神への実在性が、不可知であることへ、ひとはどのくらい多くいえるか？と評者はいう；　少なく語るほど、より良いのだと評者は付言する。

リタ・M・グロス Rita M. Gross は　仏教における究極的なもの（神々？）についての悩ましい項目を議論している。ブッダの教えにしたがう仏教が、無視論者[63]であるという、いま

---

[56] anthropomorphic models　神人同型説的モデル
[57] anthropomorphism　The ascription of human attributes, feelings, conduct, or characteristics to God or any spiritual being, or to the powers of nature,etc.　(Britanica Dictionary),神や霊的なものに対して、人間のもつ属性、感覚、性向を帰属する主義(荒)
[58] Levinas's non-existent god
[59] Ground, Start and End of Being Theologies.　存在神学での基盤、開始および終結
[60] "ground of being"　存在の基盤
[61] deistic
[62] 汎神的
[63] atheists　無神論者
以上

流やりの言い回しであるが、実際には　驚くべき数の神々（そして　ある場合には　意識しうる死後の天国）を　仏教の修行で　ひとは見出している。　全生涯を使ってこの希少の奥義を獲得するいとは別にして、どれだけの数の信者が　非人格的な神を受け容れることができるであろうか？

我々がここで仏教について、および実在性についての仏教徒の概念について話すときに、我々が意味しているその仏教の宗派は　どこか？　仏の単純にして、秘奥の教えや生活習慣は　もともとの教えの中にあるものと、教えからは本来関係ないものがあるが、それを如何にみているか？　ひとつだけ確かなものといえば、宗教の認知科学での項目との関係からこの本が利益を得ることになるであろうことである。　ワイルマン Woldman のエッセイはこの材料となるべきものと関わっている唯一のものであると　敢えて言っておきたい。

全体として、ここでの論文は、読者の予備知識がほとんど必要なく、読み進んでいけるものである。　主なる語彙は、必要なときに歴史的な背景を含めて説明してあるし、必要以上お抽象や術語は避けている。　根底を覆すような論文はないが、代わりに優れた論文はある；クラース・クラーイ Klaas Kraay、ジョン・アラン・ナイト John Allan Knight、ナガサワ Nagasawa、ジェフリー・ロング Jeffery Long、ローダ Rhoda,、 パームクイスト Palmquist、エドウィン・カーレイ Edwin Curley、そしてリー・ハーディーLee Hardy で ある。評者の個人的な好みからいえば、ハーディーであり、ヒュームが、無視論者もしくは不可知論者（懐疑主義者）への位置づけに置くべきであることを強く要求しているというところに注目する。

つまり　彼の神秘性に留めをさすことができよう。　ハーディーのこの論文だけでこの本の値段に値するとおもうが、とはいえ、3 百ドルもだすなら　なにか別の本を買うであろう。アマデウスという映画で、皇帝がモーツアルトの作品を批評した。　モーツアルトに、迫り、誤りを認めさせようとした。　宮廷官の忠告を信頼して、“あゝ、注意箇所のところが多すぎる、あゝ多すぎる”と答えたという。皇帝の耳は　そのたくさんの注意箇所のみを聞いていると考えたのである。この本の批評としては；多すぎる注意箇所となっており、読者の意識は、その箇所にとどまって、神のモデルを理解することに留まることであろう）

終わり

（参考文献）

---

[1] 荒井康全 a、システム思考での目的論理の構造と社会倫理について　ー序論　カント「判断力批判」を読んでー、2013 年度総合知学会誌、Vol.2013/1、総合知学会、2103; Arai,Y.(a), On System Thinkings, Teleological Structure and Social Molarity- Reflections on Kant's Critique of Judgement,　Journal of the Society of Multi-disciplinary Knowledge, Vol.2013/1,2013, ISBN 1345-4889

[2] 荒井康全 b、目的論理の構造としての「自由意志」と「因果性」を考える　ーカント　「純粋理性批判」の文脈を通してー、2013 年度総合知学会誌、217 頁 - 232 頁、Vol.2013/1、総合知学会、2103; Arai,Y.(b),　Essays and Briefing on “Human Free Will” and “Natural Causaility” –Reflection on Kant's Critique of Pure Reason”, Journal of the Society of Multi-disciplinary Knowledge, pp.217-232, Vol.2013/1,2013, ISBN 1345-4889

[3] あらいやすまさ　科学者の研究目的の道徳的接点を考える視点からのレビューです, http://www.amazon.co.jp/product-reviews/4480067930/ref=dpx_acr_txt?showViewpoints=1　Amazon　ブックレビュー（Sept.2014）

[4]古田博司、ヨーロッパ思想を読み解く―何が近代科学を生んだか、ちくま新書、2014、ISBN978-4-480-06793-7

[5] カント（篠田訳）「純粋理性批判」岩波文庫　1962

[6] 荒井康全　朝日記 140820　神や究極的実在性を考える「モデル」についてと今日の絵 2014-08-1923:50:09 | http://blog.goo.ne.jp/gooararai/e/40bae05ab9d2bf9f5adb3d97e2b75aed(Aug.19,2014)

[7]　松村　明編　大辞林　三省堂、1988

[8] Funk and Wagnalls, Britanica World Language Dictionary, Encyclopedia Britanica,Inc. 1954

[9] Funk and Wagnalls, Britanica World Language Dictionary, Encyclopedia Britanica,Inc. 1954

[10] Stephan Palmquist, Kant's Theistic Solution To The Problem Of Transcendental Theology,　http://staffweb.hkbu.edu.hk/ppp/srp/arts/KTS.html (Aug. 1991)

[11] 荒井康全　朝日記 140813「人類文明は・・・、情報カオスによって滅亡する。」と今日の絵 http://blog.goo.ne.jp/gooararai/e/8a892c58efb0c701453150f4807a6cfd(Aug.2014)

[12] 松村明編　大辞林　三省堂 1988

[13] Funk& Wagnalls Standard Dictionary of the English Language, EncyclopediaBritanica　1959

[14] David B. Guralnik,　Webster's New World Dictionary of the American Language 1959

[15] Funk& Wagnalls ,Standard Dictionary of the English Language, EncyclopediaBritanica　1959

[16] 橋爪大三郎,　世界がわかる宗教社会学入門　ちくま文庫　2006

[17]広松　渉等編、項目「責罪論」岩波・哲学・思想事典　岩波書店　1998

[18]広松　渉等編、項目「心情倫理、責任倫理」岩波・哲学・思想事典　岩波書店　1998

[19] Jeanine Diller and Asa Kasher (eds.), Models of God and Alternative Ultimate Realities, Springer,　Reviewed by Kelly James Clark, Grand Valley State University pp.1041,2013,http://ndpr.nd.edu/news/49854-models-of-god-and-alternative-ultimate-realities/ (Aug.2014)